



学校だより

平成27年11月20日 No.23

教育目標

- か 考える子ども
- が がんばる子ども
- や やさしい子ども
- け 元気な子ども

こたき

いわき市立小名浜西小学校長 高木清美

いくつかのお話を紹介します

二人のセールスマン

ある靴の会社の二人のサラリーマンが靴の販売促進のため、南洋の諸島に派遣された。住民たちはみんな裸足。一人のセールスマンはさっそく本社に連絡を入れた。
 「ダメです。だれも靴をはいていません。靴は売れません。」
 もう一人のセールスマンもすぐに本社に連絡してきた。
 「有望です。だれも靴をはいていません。靴の効用を教えればいくらでも売れます。」



人生の三大栄養素

筑波大学・小田晋先生は、「よく笑う人は健康で長生きできることがわかっている。一日100～200回笑うと、ボートを10分こぐのと同じ効果を心臓の働きに与える。
 ということは、血液の循環がよくなり、新陳代謝を促進する」と言っている。『笑いは内側からのジョギングである』とも言われる。
 このように、人生には『笑い』が大きな栄養素として働いている。他に三大栄養素をあげるとしたら、『愛』『感動』であろう。

一年が暮れようとしていた。夕方頃、飲食店の入り口が開いたと思ったら、ひとりの女の子が妹と弟を連れて入ってきた。みすぼらしい身なりの子供たちは、しばらくモジモジしていたが、厨房から一番近いテーブルに座った。

ヨンチョルが注文を取るために子供たちのほうに行った時、上の子が妹と弟に聞いた。
 「何を頼む？」
 「ジャージャー麺」
 「私も・・・」
 「おじさん、ジャージャー麺をふたつください。」



ヨンチョルは、厨房にいる妻のヨンソンにメニューを伝えると、ストーブの隣に立っていた。その時、子供たちの話し声が彼の耳元に聞こえてきた。
 「ねえ、お姉ちゃんは何で食べないの？」
 「うん、お昼ご飯がもたれたみたい。何も食べられないのよ。」
 7歳くらいに見える男の子が、箸を口にくわえて言った。
 「お姉ちゃん、でも食べなよ。すごくおいしいんだから」

「お姉ちゃんは今、お腹が痛くて食べられないの。今日はあなたの誕生日だから、おいしく食べて」
 上の子はそう言いながら、弟の手をぎゅっと握ってあげた。
 「お姉ちゃん・・・、私たちにもママとパパがいたら、どんなにいいかな。あんなふうに一緒に晩ご飯を食べたりして」
 妹は、向かい側のテーブルで両親と夕飯を食べている同い年くらいの子供たちをうらやましそうな目でながめていた。ちょうどその時、ヨンソンが厨房から急いで出てきた。

彼女は首をかしげながら、しばらくの間、子供たちの顔をまじまじと見た。
 「どうした？知っている子供たちか？」
 「そうねえ。あの家の子供たちだと思うんだけど・・・」
 しばらく考え込んでいたヨンソンは、子供たちに近づいていった。
 「あなた、もしかしてイネじゃないの？イネでしょ？」
 「はい、そうですけど。おばさんは誰ですか？」
 ヨンソンの突然の問い掛けに、子供は

きょとんとしていた。
「お母さんの友達よ。私を覚えてない。」
「同じ町に住んでいたんだけど、あなたが小さい時だったから、思い出せないみたいだね。それはそうと、お母さんとお父さんがいなくて、どうやって暮らしているの？」
彼女はうれしそうに、子供たちの顔をひとつひとつ、なでていた。
「インジョンも、もうこんなに大きくなったんだね。昔はよちよち歩きも、よくできなかったのに・・・」
ようやく思い出ったように、かたくなっていた子供たちの顔に明るい笑みがこぼれた。
「少し待ってて。おばさんがおいしいものを作ってあげるから」
ヨンソンは急いで厨房に入っていった。そして、しばらくすると、チャーシュー麺3つと酢豚1皿を出してきた。子供たちが料理を食べている間、彼女はずっと満足そうな顔でながめていた。



「さようなら」
「うん。元気でね。車に気をつけて・・・チャーシュー麺が食べたければ、いつでもおいで。わかった？」
「はい・・・」
ヨンソンはドアの前に立ち、子供たちが遠くに歩いていくまで手を振ってあげた。

子供たちが帰った後、ヨンチョルはヨンソンに聞いた。
「どこの家の子供たちだっけ？俺はいくら考えても思い出せないけど・・・」
「実は私も知らない子供たちなのよ。お母さんとお父さんがいないからって料理をただであげたら、子供たちが傷つくかもしれないじゃない。お母さんの友達だと言えば、また来ることもできるし・・・」
「そうだったのか。だけど、子供たちの名前はどうやって知ったんだ？」
「子供たちが話すのを聞いていたの。厨房のすぐ前だから、中まで全部、聞こえてたのよ」
「名前まで知っているから、本当の知り合いの子供たちかと思ったよ」
「今日は弟の誕生日だったみたい。自分は食べたくても我慢して、弟と妹だけに頼んであげる様子が、どれほどかわいそうに見えたことか・・・」

ヨンソンの目にはじんでの涙は、すぐにでもこぼれ落ちそうだった。貧しさにくじけている子供たちを傷つけないようにしていた妻を見て、ヨンチョルはたくさんのことを考えた。傷つけずに愛するというのは、どれほど難しいことだろう。黙って痛みを包み込むのは、どれほど美しいことだろう。

思いやりの心が育っていくのは、だいたい次のような順序ではないでしょうか。

自分以外の人にも気持ちがあるということに気づくこと。(これがおもいやりの種ですね。) やがて、その人がどんな気持ちなのかを想像することができる。そして、なぐさめてあげたいとか、喜ばしてあげたい、傷つけないなどの心が芽生える。そして、相手が喜んでくれると、自分も嬉しくなり、自分の喜びになる。

ひとつひとつのステップには、山ほどたくさんの体験を通しての成長が必要となるでしょう。けっして促成栽培できるものではありません。そして、ここで注意したいのは、この場合の人(相手)というのは漠然とした一般人ではありません。私たち大人でも、新聞で気の毒な記事を読んで思いやるのと、身内に起きたこととは、雲泥の差があります。子どもが小さければなおさらのこと。相手に気持ちがあることとか、相手が泣くと心が痛むとか、相手が喜ぶと嬉しいという『相手』は、かなり関係の強い人(両親、兄弟姉妹、祖父母など)でなければおこりにくいものです。たとえば、こんな場面の例をあげます。子どもが留守番をしていた時に、雨がふってきた。子どもは洗濯物に気づいて、部屋の中にとりこんでくれたとします。帰ってきたお母さんは、あらよかったわと思うと同時に、こんなクチャクチャに置いとかないで、どうせならただんでくれればよかったのに、とか、まだ乾いていないんだから、部屋の中にかけておいてくれればよかったのに、と思うことがあります。「ありがとうね。でも、今度こんなことになったときは、ただんでおいてくれると、もっと嬉しいな。」と、言ってしまいます。これでは、子どもはあんまり嬉しくありません。お母さんが、喜んでくれたとも思えないのです。そうすると子どもは、今度のもうとりこむのはやめよう。または、今度はとりこんでたたくというのを義務のように感じてしまうのです。まずはとりこんだだけだって立派なんだから、「わあー、うれしい。よく、気がついたね。お母さんヒヤヒヤしてたのよ。せっかく洗濯してったのよと思っただけ。あんたは、すばらしい!」と、喜びを見せるあげるようにします。子どもは、よかった、お母さんあんなに嬉しそう。いいことしちゃった! といい気分になります。人が喜んでくれることで自分が嬉しいという体験をいっぱいさせてあげたい。そうすると、思いやりの芽がでてくるかもしれない・・・

友だちはなんと、この話を15年もおぼえていてくれたのです。先日、「わたし、あれ以来、ずーっと心がけてるの。仕事もしているからなおのこと、共に思いやる家族でいたいからね。おかげで、いいこどもたちよ。ありがとう」と言われて、びっくりしました。(言った本人はすっかり忘れていました)

だい好きなおかあさんが自分のしたことで、素直に喜んでくれればうれしいですね。無意識に行動したら相手がすごく喜んでくれた。そのことが自分にはとてもうれしかった。あったかい、いい気分。幼いこどもの場合は特に、このパターンが多いかもしれません。

逆の場合もあります。おかあさんにいやなことがあって、こどもに八つ当たりしてしまう。そんなときは、冷静になったら「さっきはごめんね。おかあさんいやなことがあったんだ。それで、あなたに八つ当たりしちゃった。でも、おかげでちょっと気分が落ちついたわ。あなたに悪かったけれど、ありがとうね」と、ぎゅっと抱きしめてあげたらいい。こうすれば、さっきの八つ当りは、こどもにとって決して迷惑なことにはならなかったのではないのでしょうか。おかあさんのいやな気持ちを引き受けてあげたことになるのですからね。

こどもはだれだって親が好きですし、親に好かれないと思っています。親がなにを喜び、なにに怒り、なにに悲しむのか、いつも気にかかっています。そして、なるべくだったら、親がほめてくれる姿を見せたいと思っています。このことは、いやでもいやじゃなくても、そういうものなんです。

まずは、いちばん身近な親の気持ちをわかるといふこと、親の価値観が伝わるということが、こどもが「おかあさんだったら」「おとうさんだったら」と想像することができる、つまり、自分以外の人をおもいやる第一歩という気がします。

そして二歩目は、親自身がおもいやりのある態度をみせること。これがむずかしい！あなたは、買い物の紙袋がやぶけて中身がころころころがりだした通りがかりの人に「あら大変」と手助けしてあげられますか？

駅の階段、車椅子に力をかせますか？

迷子らしいこどもに「どうしたの？」と、声をかけてあげられますか？

こどもの前でくすてきなおとな>をしていないような気がしませんか？

もっとむずかしいのが、自分のこどもの場合。(他人のこどもにやさしくすることのほうが、簡単なんですよね。)

自分のこどもがころんで痛がっているのに「だから、いったでしょ！ さっさと立ちなさい！」って言ってません？

だい好きなイチゴがテーブルからころがり落ちてしまって悲しい顔のとき「よく見ないからよ！」

だい好きな友だちからもらってきた宝物の石、捨てちゃったりしてませんか？

こどもが話したくない友だちとのトラブル、無理やり口を割らしていませんか？

こう考えると、こどもだけにおもいやりのある人に育ててほしいと願うのは無理、ということなんでしょうね。わが子だからやさしくできない。わが子だからやさしくなってほしい。あら、大変！自分自身も心がけなきゃならないし、さらに、こどもをよく見て、反応してあげなくちゃならないってことですね。うーん！そこには、わたしがかかっている！

でも、親だって<おもいやり完成人>にはなっていないわけですから、まあ、日々反省し、心がけているのを見せていくということでしょうか。それだけ大変で貴重な価値のあることなんです。子育ては親育ちと言います。いっしょに、磨いていきましょう。

やがて、だい好きな人はおとうさんやおかあさんだけでなく、先生や友だちにひろがっていきます。そして、ほめられてうれしいとか、やさしくして喜んでもらえた、ということだけでなく、その人にとってどうなのかということにまで、気持ちや考えがおよんでいくことでしょうか。